☆年間第19主日(8月13日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読　(列王記 19 章 9a, 11-13a 節)

その日、エリヤは神の山ホレブに着き、 そこにあった洞穴に入り、夜を過ごした。 主は、「そこを出て、山の中で主の前に立ちなさい」と言われた。見よ、そのとき主が通り過ぎて行かれた。 主の御前には非常に激しい風が起こり、山を裂き、岩を砕いた。 しかし、風の中に主はおられなかった。風の後に地震が起こった。 しかし、地震の中にも主はおられなかった。地震の後に火が起こった。しかし、火の中にも主はおられなかった。 火の後に、静かにささやく声が聞こえた。 それを聞くと、エリヤは外套で顔を覆い、出て来て、洞穴の入り口に立った。

第二朗読(使徒パウロのローマの教会への手紙 9 章 1-5 節)

皆さん、 わたしはキリストに結ばれた者として真実を語り、偽りは言わない。 わたしの良心も聖霊によって証ししていることですが、 わたしには深い悲しみがあり、わたしの心には絶え間ない痛みがあります。 わたし自身、兄弟たち、つまり肉による同胞のためならば、 キリストから離され、神から見捨てられた者となってもよいとさえ思っています。 彼らはイスラエルの民です。 神の子としての身分、栄光、契約、律法、礼拝、約束は彼らのものです。 先祖たちも彼らのものであり、肉によればキリストも彼らから出られたのです。 キリストは、万物の上におられる、永遠にほめたたえられる神、アーメン。

福音朗読　(マタイよる福音書　14 章 22-33 節)

人々がパンを食べて満足した後、イエスは弟子たちを強いて舟に乗せ、向こう岸へ先に行かせ、その間に群衆を解散させられた。 群衆を解散させてから、祈るためにひとり山にお登りになった。 夕方になっても、ただひとりそこにおられた。 ところが、舟は既に陸から何スタディオンか離れており、

逆風のために波に悩まされていた。 夜が明けるころ、イエスは湖の上を歩いて弟子たちのところに行かれた。 弟子たちは、イエスが湖上を歩いておられるのを見て、「幽霊だ」と言っておびえ、恐怖のあまり叫び声をあげた。イエスはすぐ彼らに話しかけられた。「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない。」すると、ペトロが答えた。「主よ、あなたでしたら、わたしに命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください。」イエスが「来なさい」と言われたので、 ペトロは舟から降りて水の上を歩き、イエスの方へ進んだ。 しかし、強い風に気がついて怖くなり、沈みかけたので、「主よ、助けてください」と叫んだ。 イエスはすぐに手を伸ばして捕まえ、「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」と言われた。 そして、二人が舟に乗り込むと、風は静まった。舟の中にいた人たちは、「本当に、あなたは神の子です」と言ってイエスを拝んだ。

朗読解説　―主任司祭より皆様へ―

皆さまお元気ですか。台風 7 号が日本列島に迫ってきていて、これから天気が荒れ模様になり心配です。15 日の聖母被昇天祭も雨の中でしょうか。15 日の聖母被昇天祭のミサは朝の 9 時からですが、ご無理なさらず自宅でお祈りください。夏のカンカン照りや台風の暴風などの中でも神さまは絶えず私たちに語り掛けておられます。今日語られる神のことばに耳を澄ませて聴きましょう。

第一朗読　（列王記　19 章 9a, 11-13a 節）

預言者エリアが新たな使命を与えられた場面が読まれます。預言者は神の民イスラエルのために神の言葉を告げる役を担った人のことを指しますが、多くの場合、神に対する反逆の民に神の怒りのメッセージを伝えることになり、イスラエルの民から、特にその指導者方嫌われ、迫害を受けたのです。預言者エリアもその一人です。その辛さのあまり死を願うまでになるのですが、神はさらに使命を与えられます。そしてその使命はささやく小さな声であったと記されています。私たちも苦難の中で祈るとき、神の声は時として聴き辛いことがあります。特に自分にとって願ってもいないことが起こった

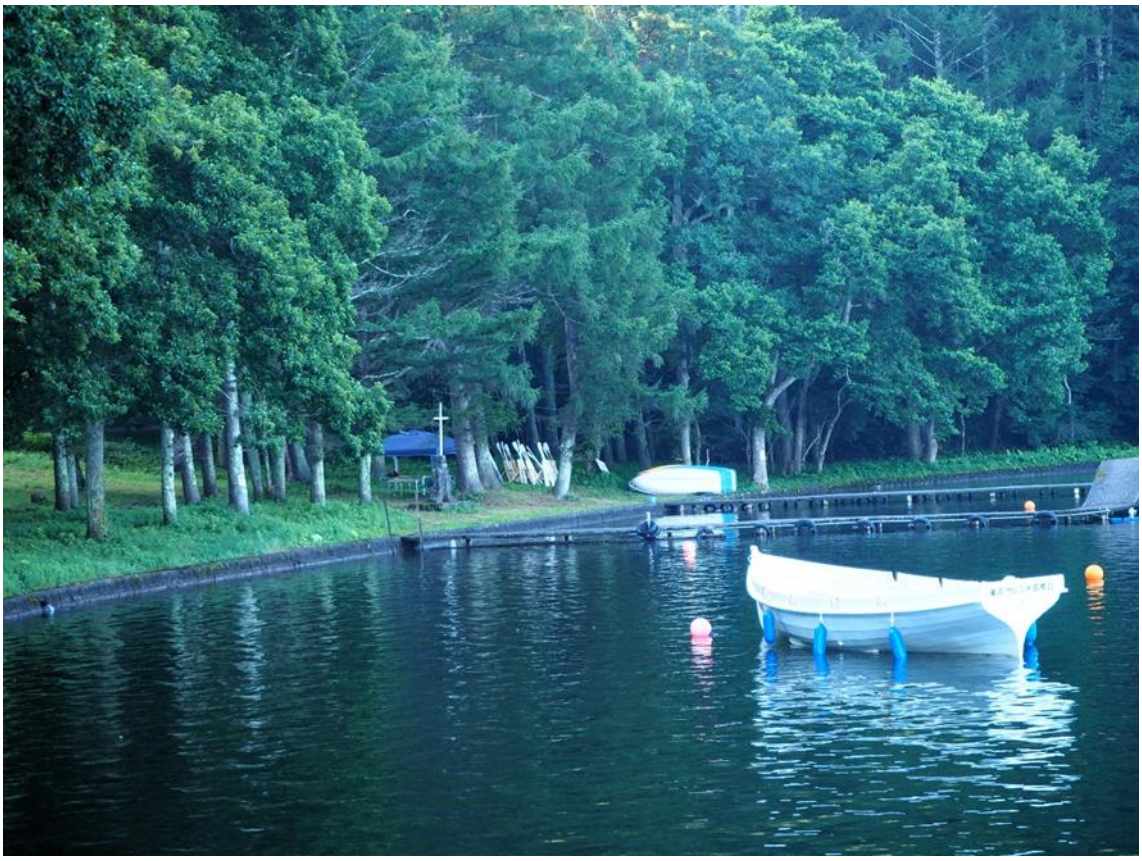
時です。その中に神の声を見出すのは大変ですが、その困難の中に神の声を聴けるようになりたいものですね。

第二朗読（使徒パウロのローマの教会への手紙 9 章 1-5 節）

異邦人への宣教に意欲を燃やしていたパウロですが、彼の心に痛みとしてあったのは同胞の回心を願う心でした。彼は自分でも証言している通り、生粋のイスラエル人でした。従ってイスラエル人の多くがイエスの教えに背いていたことは心の大きな痛みになっていたのです。そのために逆説的ではありますが、自分がキリストから見放されても同胞が救いに至るならばそれでも良いとさえ思っていると述べているのです。神から選ばれて神の民として自負しているイスラエルの民が、神の独り子イエス・キリストに従っていないことは理解できないばかりか、自分もその民の一員としてキリストに従う民となってほしいとの本音を述べているのです。

福音朗読　（マタイよる福音書 14 章 22-33 節）

湖の中で嵐に遭い苦しんでいる弟子たちの様子が語られています。弟子たちのほとんどが漁師でしたから多少の嵐は経験済だったと思いますが、弟子たちを助けようとまるで幽霊のように現れたイエスに弟子たちは驚いたのです。「安心しなさい、私だ」と。私たちも様々な困難に遭遇すると、神の存在すら忘れて慌てふためくのです。神に対する信仰が身についていないのです。私たちの困難に気づかない神ではなく、神はそっと助けの手を伸べに近づかれているのです。神は私たちが罪のうちに溺れ、滅んでしまうことを望んではおられず、生きることを望まれているのです。ペトロが溺れそうになった時もそうです。神はその手を伸ばして救い上げてくださるのです。神に信頼するようにしましょう。



長野県信濃町　野尻湖畔のボート（2023 年 7 月）

P.S.

　先週の「祈りの連帯」についてのお知らせです。教会委員会でも話し合いまして、すぐにでも実施していきたいと思います。毎日の夜 8 時から 9 時の間に「祈る習慣」を家庭で作り上げ、足立教会全体の祈りの信仰生活を豊かにすることが目的です。お年の方も多くなり教会のミサに参加できなくなっても、教会共同体と一緒に祈ることが出来れば、孤独に感じることなく、ミサで祈っているのと同じように感じられるのではないかと思います。

カトリック足立教会
主任司祭　野口重光